

薬食いと川柳

表向き肉食を禁じられていた江戸時代ではあったが、吉原に象徴される「町人文化」の華を咲かせたこの時代、イキのいい江戸っ子たちが、うまい牛肉やシシ肉を黙って見ているはずはなかった。

「薬喰い隣の亭主箸持参」の句からも分かるように、江戸時代には牛、馬、イノシシ、鹿、クマなど、「四つ足」を食べることを「薬食い」、つまり「薬を食べる」といい、こんな隠語があったことでも、肉食禁止なんのそのといったムードがあったことは疑いない。事実、いまの千代田区麹町や平河町あたりには、イノシシや鹿をはじめタヌキ、キツネ、クマからサルまで、半ばおおつぴらに獣肉を売る店があつて、川柳子にも、

「狩場ほどぶつ積んで置く麹町」「麹町狐を馬にのせて来る」と、半ばあきれながら冷やかしている。表向き禁止の獣肉を、こっそり食べることを「薬食い」という以上、売るほうもつともらしい顔をしなければ格好がつかなかったらしく、「けだもの屋敷医者ほどは口をきき」といった句もあつて、鹿肉は産後



にいいとかクマ肉は虚弱者向き、サルはマラリヤに効くなどと、いっぱしの効能書を並べ立てて売りまくったようである。

肉食に「薬食い」の隠語を用いる以上、それぞれの肉にも「符丁」を用い、イノシシをボタン、牛を冬ボタン、鹿をモミジなどと、たいそう美化して呼んだが、「冷え症で二十日ほど喰う冬牡丹」の句があるところを見ると、当時の女性もなかなかどうして……。

もともと江戸時代の町人の女房は、亭主を尻に敷くような甲斐性のある女性が多かった、というのが風俗史家の伝えるところだから、「薬喰い女房させるを引ったくり」というのが一般の風景だったようだ。